

自然系学芸員シマムーの にこここ通信 NO.4

今日はクジラのお話です。浦安とクジラは関係が無さそうですが、博物館資料や市内にはクジラにまつわるものがあるので紹介をしたいと思います。

「大鯨の碑」

当代島にある稲荷神社（当代島3-13-1）には「大鯨の碑」があります。浦安に大鯨…？という不思議な記念碑ですが、そのいわれは、明治8年（1875年）地元の漁師である高梨源八と西脇清吉が浦安の三枚洲（現在の旧江戸川河口）で大鯨を見つけたことに始まります。2人は大格闘の末に大鯨を捉え、当時の金額で二百円にて売ることができたそうです。この出来事の後、2人の漁師の周りではどこに行っても大鯨捕獲の話で持ちきりとなってしまいました。仕事が手に付かなくなってしまった2人は、この騒ぎに終止符を打つため、大鯨の碑を神社に奉納したということです。かつては東京湾にも、餌であるイワシなどの小魚を求めクジラがやってきていたのでしょう。



口）で大鯨を見つけたことに始まります。2人は大格闘の末に大鯨を捉え、当時の金額で二百円にて売ることができたそうです。この出来事の後、2人の漁師の周りではどこに行っても大鯨捕獲の話で持ちきりとなってしまいました。仕事が手に付かなくなってしまった2人は、この騒ぎに終止符を打つため、大鯨の碑を神社に奉納したということです。かつては東京湾にも、餌であるイワシなどの小魚を求めクジラがやってきていたのでしょう。

「クジラの胸骨」

博物館には、郷土資料館時代から受け継いだ資料もたくさんあります。その中に、「クジラの胸骨」があります。岩瀬利夫氏の祖父が浦安の漁場（現在の高洲あたり）で拾った白く大きな骨で、クジラの骨といわれる資料があります。財団法人「日本鯨類研究所」に鑑定を依頼したところ、形状からは「ナガスクジラ」か「シロナガスクジラ」の胸骨であり、東京湾口で死んで流れ着くクジラの頻度から「ナガスクジラ」ではないかと判断されました。骨の大きさから、体長は18~19mと推定されるそうです。骨の由来については、「人間がクジラをとった場合、肉をとるだけでなく骨まで絞って油をとるため、骨を捨てることはない。どこで死んだかはわからないが、死んで浮遊したものがバラバラになり浦安に打ちあがったのではないか。」ということでした。死んで東京湾に流れ着く「ナガスクジラ」の頻度は10年に一度位だそうなので、広い東京湾の中でクジラの骨を拾った岩瀬氏の祖父は貴重な資料を浦安に残してくれたと思います。



絞って油をとるため、骨を捨てることはない。どこで死んだかはわからないが、死んで浮遊したものがバラバラになり浦安に打ちあがったのではないか。」ということでした。死んで東京湾に流れ着く「ナガスクジラ」の頻度は10年に一度位だそうなので、広い東京湾の中でクジラの骨を拾った岩瀬氏の祖父は貴重な資料を浦安に残してくれたと思います。

近年、魚食性の大形の回遊魚が浦安でも釣れることがあるそうです。クジラの餌であるイワシなどの餌を追い、大形の回遊魚がやって来るということは、クジラたちも東京湾内に入ってきている可能性があると思います。現代の浦安でも、海岸からクジラの姿を見たいものですね。

QRコードを読み込むと「浦安市郷土博物館」のホームページが開きます。バックナンバーも読めますよ～！

